２１世紀瓦版７０３号（2014 年 10 月 27 日）

「その作家が何を語るかではなく、その作家が何者なのか」が肝心である

まとめとして、池上コラムと高橋論壇時評との決定的な違いの意味について把握してみる。前者は朝日の「慰安婦報道検証」記事に対して、「検証の不十分さ」と「謝罪」について書いた。後者はその記事があったことだけに触れて、記事そのものに対しては素通りし、なにも書かなかった。つまり、書きたくないということを書いていた。決定的な違いはそこにみられる。前者は意識していたかどうかにかかわらず、自分が書いている足下の紙面を問い、問題の現場とすることになったのに対して、後者は反対に自分が書いている足下の紙面を問わずに、問題の現場としえなかったのである。おそらく前者は意識せずしてそうなってしまったと思われるが、そのような書き手であることを明らかにしてみせた。しかし、後者もまた前者のようであらねばならなかったであろうのに、逃避距離を保つようにしてそのような書き手ではないことを浮かび上がらせてしまったのである。「書くこと」が自分の足下を穿っていく危険な表現行為であるなら、後者はそのような「書くこと」から遠い時評を無邪気に自分と読者にではなく、朝日に毎月提出していたのであろう。

さて、２００１年５月９日、エルサレムで開催された「エルサレム賞」受賞式におけるスーザン・ソンタグの講演記録（『この時代に想う　テロへの眼差し』所収）は、次のようなものである。

《私たち作家は、言葉に心をくだく。言葉は意味をもち、言葉は指し示す。言葉は矢である。現実をおおう肌理の粗い皮膜に矢が突き刺さる。ものものしく、おおざっぱであればあるほど、言葉は部屋またはトンネルに似てくる。拡張もすれば、陥没もする。悪臭が充満し始めることもある。部屋としての言葉は、むしろ他の部屋を想起させることがよくある ── あちらに住みたいと思う部屋、あるいは、すでに自分が住んでいる部屋を。住みこなす術（すべ）、あるいはその知恵を失わせる空間もあるようだ。そして、住みつくべき術を私たちがもはや見失ってしまった重たい精神的志向は、いずれ廃棄され、囲い込まれ、封印される。

たとえば「平和」という言葉で、私たちは何を言わんとしているのだろう。不和がないということか。事を忘れたということか。許すということか。あるいは、甚大な徒労感、疲労、または怨嗟の空洞化のことか。

おおかたの人々が「平和」という言葉で言わんとしていることは、勝利ではないかと思える。自分たちの側にとっての勝利。だが、ある人々にとっての勝利が「平和」であるなら、その平和は、他の人々にとっては敗北を意味する。

原則として平和は望ましいものだが、**もし平和維持のために、正当な主張を放棄しなければならないとしたら、しかもそれを放棄することが受け入れがたいことだったとしたら、次にとる道は何だろう。もっともありうるのは、総力戦にいたらない程度の手段で戦争に打って出ることだろう**。だが、そうなれば、平和への希求は欺瞞的なものと映るか、さもなくば、さほど切迫した希求としては感受されない。平和は住まい方がもはやわからなくなった空間となる。もう一度、あえて平和に居を定める、つまり平和を植民地化することになってくる。

さて、「名誉」という言葉で私たちは何を言おうとしているのか。

個人の行動を厳密に吟味する基準としての名誉は、はるか昔のものになってしまったようだ。ところが、名誉を授ける慣習 ── 自分たち自身あるいは相互に誉めあうこと ── はひるまず続いている。

名誉を授けることは、共通に信奉していると思われる基準を肯定することである。名誉を受け入れることは、束の間でも、自分はそれに値すると信じることだ（謙遜を重んじるならば、それに値しなくはないと信じる、と言うべきだろう）。名誉を授けると言われて辞退するのは、不粋、天の邪鬼、尊大な態度ともなろう。

賞賛すべき人士を選んできた経緯から、賞というものは、名誉を、また名誉を授ける器量を積み重ねてゆく。

この基準に照らして、「エルサレム賞」という論争を呼んでいる名称をもつ賞について考えてみよう。比較的歴史は浅いが、この賞は２０世紀後半の最良の作家の何人かに授けられてきた。どんな明白な基準からしても、文学賞の名にふさわしいこの賞は、しかし、「エルサレム文学賞」ではなく、「社会における個人の自由のためのエルサレム賞」と呼ばれている。

この賞を受けたすべての作家が、社会における個人の自由を擁護してきたのだろうか。彼ら ── 私

自身が受賞した今では「私たち」と言うべきなのだが ── に共通しているのは、そのことなのだろうか。

そうとは思えない。

受賞者たちは広範囲の政治的立場を代表しているが、それだけではない。なかには、この賞にとって重要な言葉である自由、個人、社会……といったものにほとんど触れてこなかった人たちもいる。

だが**肝心なのは、その作家が何を語るかではなく、その作家が何者なのか、である**。

作家たち ── 文学という共同体の成員たちを指す ── は、個々人の洞察力の持続性（また、個々人の洞察力の必要性）を体現している。

「インディヴィジュアル」という言葉を、私は名詞（個人）としてより、形容詞（個々の、個人の）として使いたい。

いまの時代の、「個」をもち上げる、とどまるところを知らないプロパガンダは、私にはきわめて疑わしいものに思える。というのも、**「個人性、個性」という言葉じたいがますます利己性や自分本位の同義語となってきている**からだ。資本主義社会は、「個人性、個性」、また「自由」 ── これらは、自己を際限なく誇大化する権利とか、ものを買い、入手し、使い果たし、消費し、陳腐化する自由とほとんど変わらぬ意味しかない ── を賞賛することに既得権をもつようになってきている。

自己培養に何らかの固有の価値があるとは、私は信じない。そして、利他主義、他者への顧慮という基準をもたない文化（この用語は規範的に使っている）は存在しないと考えている。私は、人間の生命・生活のありうる姿を見すえる感覚を伸ばすことこそ、固有の価値であると信じている。文学は、まず読者として、次いで作者として、その企図に私を巻き込んだわけだが、それは他の自己存在たちへの、他の領域への、他のもろもろの夢への、他の言葉たちへの、また他の関心分野への、私が抱く共感の延長線上において起こったことだった。

作家、文学の作り手としての私は、語り手であるとともに、黙考する者でもある。思念が私を動かす。だが、小説は思念ではなく、形態によって作られる。言語の形態。表現の形態。形態を獲得する以前に、私の頭のなかに物語はない（ウラディミール・ナヴォコフが「ものそのものよりも先に、もののパターンが存在する」と言うように）。そして ── 暗在的に、あるいは黙示的に ── 小説とは、文学とは何か、また何でありうるか、についての作者の感覚をもとにして作られる。

あらゆる作家の作品、あらゆる文学的な作業は、文学それじたいに関する記述であるか、あるいは、そのようなものに帰結する。文学の擁護は、作家の主要なテーマの一つとなってきた。だが、オスカー・ワイルドが見たとおり、「芸術における真実は、これまた真実である矛盾を抱え込んだ真実である」。ワイルドの言葉をあえて換言すれば、**文学における真実は、これまた真実である対立物を抱え込んだ真実である**。

したがって文学は ── たんに説明的にだけではなく、規定的に言うと ── 自己意識、疑義、躊躇、執拗な検証である。それはまた ── ここでも、説明と同時に規定を言うと ── 歌、自然発生性、祝祭、至福である。

文学をめぐる観念は ── たとえば、愛をめぐる観念とは違って ── ほとんどの場合、他の人々の観念への応答としてしか立ち上がってこない。反応的な観念なのだ。

たとえば、私がこれこれのことを言うのは、人 ── あるいはほとんどの人 ── があれこれのことを言っている、という印象がもとにあってのことだ。

そのような語り方をすることによって、私はより広範囲の熱意、あるいは異なる実践を取り込む余地を作りたい。思念は許諾を与える、そして私は、自分と異なる感情や実践に許諾を与えたい。

相手がああ言うなら、私はこう言う。それは、作家というものが、ときに職能としての反対者であるから、というだけの理由ではない。制度としての性格をおびるあらゆる実践につきものの不均衡や一面性を是正しよう、というだけの理由でもない。しかも**文学もまた、制度である**。理由は、文学が、本来的に矛盾するもろもろの希求に根ざす実践だからだ。

私の見解を述べれば、文学についてのいかなる記述も、単一では真理ではない ── つまり、それらは還元的であり、たんに論争のための論議となっている。ひるがえって、真実をこめて文学について語ろうとすれば、必然的に逆説的に語るしかない。

ことの次第はこうだ。重要な文学作品、文学の名に値する作品のひとつひとつは、単数性、個の声という理想の化身となる。ところが集積としての文学は、複数性、多様性、混在という理想の化身となる。》（つづく、太字は引用者、以降も同じ）